

能登島・閨

# 観音堂と行者ヶ端

この地に残る自然と文化遺産は  
今を生きる私たちに何を伝えようとしているのだろうか

## 能登では珍しい群在地

能登島の西側にある能登島閨町。鳴島入江に面し、きれいに整備された閨フィッシングパークの近くに「閨観音堂入口」と書かれた案内看板が道路沿いに立っている。矢印の先を眺めると周囲を水田に囲まれた、こもりとした森が見える。入り口にある階段を登ると、正面には観音堂があり、参道の両脇には五輪塔(※1)が整然と並べられており、訪れる者を圧倒する。参道から境内を見渡すと他にも五輪塔や板碑(※2)が群在している。五輪塔は、ほぼ完全な形をしているものが約30基、その他に10数基が散在している。能登では穴水町の明泉寺に次ぐ群在地ということ、知る人ぞ知る隠れた名所といったところか。

閨観音堂は室町時代初期の応永26年(1419年)に中島町筆染の

住職玄錠により造立され、本尊には、木造聖観音坐像が安置されている。

## 修行者の足跡

観音堂の近く、鳴島入江に突き出た水田の先端に「行者ヶ端」と呼ばれる円墳上の塚がある。その昔、この地には体を地に伏せて修行する者(「行者」)があり、村人はこの行者のことを「臥行者」と呼び、風雨いとわず修行に励む行者を尊敬の眼差しで見っていたという。「行者ヶ端」にもまた、ほぼ完全な形を保ったままの比較的大きな五輪塔が3基とその他数基が残っている。

能登島の地名で、臥行者が伏せて修行したところが「閨」、その母の祖母尼が住んでいたところを「祖母ヶ浦」というなど、臥行者にまつわる地名として現在に伝えられている。

「石工」



溝 清隆さん  
(能登島閨町)

大正時代、八十八体の石仏を作るために閨の地に集まってきた多くの石工の一人が、私の祖父でした(本文参照)。八十八体の石仏づくりを終えると多くの石工はこの地を去りましたが、祖父だけは観音堂から採れる良質な御影石に魅了され、この地に残ったようです。今ではこの地に残る石工は私だけになりましたが、続けられる限り、受け継がれたものを守っていきたいと思っています。



つながった2つの歴史

大正時代のある日、観音さまの石で石仏を作ればよい、という夢を見た者がいたという。中島町笠師にある大覚寺の住職である。大覚寺といえば、広報ななお10月号で紹介した「北國八十八ヶ所霊場」。ここにある八十八体の石仏が、実はこの閨の地から運ばれたものなのだ知り、驚いた。

大覚寺住職が北陸の石工を募り、観音堂のある閨の地に集めた。石は観音堂の西側の山から切り出されたが、硬く刻みにくかったことから何人も石工が逃げ出したという。完成した石仏は嶋島入江から大覚寺付近まで舟で運ばれ、そこから担いで運ばれた。石仏を舟に乗せようとした時、不思議なことに、その中の一体だけ頭が取れたのだという。現在、その石仏は石を切り出した場所に安置され、静かにこの地を見守っている。

ふるさとを守り続ける

その昔、閨の集落は観音堂の近くにあったといわれている。いつの時代に、またどういった理由で現在の場所へ移ったかは定かではない。それでも、現在の地に住む住民はふるさとに誇りを持ち、地域の伝統を守る

り続けている。毎年4月18日と9月18日には観音堂で観音まつりが行われ、地元の人だけでなく、七尾地区や対岸の穴水町からも参列があると聞く。少子高齢化などの影響もあり、祭礼などの地域の伝統文化を守り続けることがだんだんと難しくなっていることは事実である。それでも、先祖から受け継いだ文化遺産やふるさとを愛する心はいつまでも守り続けていってほしいものである。

※1五輪塔

主に供養塔・墓塔として使われる仏塔の一種。下から方形Ⅱ地輪、円形Ⅱ水輪、三角形Ⅱ火輪、半月形Ⅱ風輪、宝珠形Ⅱ空輪によって構成され、古代インドにおいて宇宙の構成要素・元素と考えられた五大下から地・水・火・風・空を表すもの。

※2板碑

主に供養塔として使われる石碑の一種。板状に加工した石材に梵字などを刻んだもの。



(参考資料)能登の文化財、能登島町史ほか